

子どもの笑顔から広がる 保護者との共同と学級・学校づくり

大島悦子 × 熊本勝重

連載を振り返って

大島 障害児学級は、子どもたちにとって家庭みたいな存在だと思っています。なぜなら、特に大阪市内ではこの間、貧困と格差が広がってきており、厳しい生活実態の子どもが多いからです。

子どもたちが学校でちよつと認められたことでもなせうれしいと感じるのか。それは、生活の厳しさからもきていると思います。

心からホッとできて、「楽しい」「やりたい」という思いを感じ合える場にした。そして、子どもたちが、生きていく上での夢を語れるようになっていくことが大事だと思ってきました。

熊本 僕は、障害児学級で子どもたちが、どう一歩ずつ成長していくのかを、伝えたいという思いがありました。

今、学校では、「みんなについていける

ように」「勉強ができるように」が中心になり、「人として生きる」「大人になっていく」ということが追いやられているように感じます。ともに育っていける仲間がいることは、とても気持ちがいいこと。そんな子どもたちの姿を見ると、教師をやっていてよかったなあとします。保護者も、漢字を○個覚えたから：ではなく、子どもたちの喜怒哀楽、すてきな生活を見て応援してくれる。そこが障害児教育にとって一番大事な部分なのかな。

大島 熊本さんの「心の中にもう一人の自分を育ててほしい」というねがいは、その後の中学校の加藤さんの実践につながっていますよね。受け入れがたい自分、人たちがう自身に直面していく。それは、厳しいことですが、成長の証でもあり、その時に仲間がいる、大人の助けがある、まんざらでない自分がある。もう一回自分をつかみ直し、進路を選択して将来に夢をもって卒業していく。加藤さんはそ



こを伝えたかったのだと思います。わが子に、自立してほしいというねがいが、形を変えて、高校に行かせたい、勉強ができなくて、という思いに変わってしまうことがあります。

しかし、通常の学級で傷ついてきた子どもたちが、「勉強」で癒やされることもある。受験勉強という矮小化されたものではなく、学びがいのある学びでね。それが11月号のしゅうくんの「社会になったね」という言葉につながっているんですね。

熊本 学びがいのある学びといえば、唐岩さんの実践は子どもが生き生きしていますよね。今、障害児学級では、個別の学習が強調されていますが、唐岩さんは、みんなで集まるからこそできる醍醐味を伝えてくれました。

害児学級への信頼をつくっていくのだと思います。

自由な教育でありたい

熊本 連載を読んだ若い先生から、「あんな実践やりたいけど、でも：」という話を聞きます。

今回の連載で、楽しそうな実践だと思っても、そこから、どう目の前の子どもたちに向かい、どんな集団づくりをしていくのが問題です。子どもが集まっても衝立を立てて個別学習。しつけるための集団づくり。先生はプリントづくりに精を出す。これではだめです。

私たちのような実践が、遠い存在だと思われ、こんなことをしたいけどなかなかできないという現状もありますよね？

大島 子どもの「やりたい」というねがいを実現していくことで、大人の意をこえたことができる。そんな話をしたら、「なんでそんな自由にできるの？」と言われたことがあります。たしかに障害児学級には教科書がない。だからこそ子どものねがいをどう掴んで、どう実現していくか、そこが醍醐味だと思います。

今は、個別指導計画、年間の行事など、計画を出して実行しなくてははいけない。でも、計画にがんじがらめになると、実践が息苦しいものになります。自由でないと教育はおもしろくないですよ。熊本 本当ですね。子どもたちあつての教育という点は一緒なんですけどね。



子どもができたかできなかったかの評価は、教師の評価になり、学校評価にもつながる。上からがんじがらめですね。研究会で話をすると、「ホッとしました」という感想を聞きます。自由な実践をしたけれども、何をしたいかわからない。やりたいことはあっても、今は、全体計画を示さないと「これだけやりたいんですけど」という訳にはいけません。そんなしんどさがあるんでしょうね。私たちも、楽しそうにやっていると思われていたけれども、実はそうではない部分もある。大島さんはどうですか？

大島 初任から3年間いた障害児学校では、集団をつくったり、保護者や教職員と一緒に、というのが当たり前。それが、大阪市内の障害児学級に転勤したときに、カルチャーショックを受けました。というのは、以前から「養護学校不要論」があつて、「障害」は差別。「発達」なんて言葉も言えない。「原学級」保障が当たり前だったんです。そんななか

で、障害児学級、しかも集団をつくりたいと言つても、何もできませんでした。それなら、子どもとじっくり付き合おう、と記録を書いたため、三カ月経ったとき、その子と向き合つて、こんな変化があつて、こんなことがうれしかった、と職員会議で話しました。まあ批判されましたよ。でも、保護者たちが、先生は子どものこと大事にしてくれる、と気持ちを寄せてくれ、なんとかやってこれました。でも、転勤すると、また一から。ここでも保護者とながら、だんだん発達

は差別というのと言われなくなり：。実践を積み上げていくというのは個人の努力だけでは難しい。学校ぐるみで子どもにとって何が大事かを確認し、子どものかわいらしさとか成長したところを保護者と語り合えないと学校づくりはできないのです。

そのころよく仲間と「私たちの仕事は砂の城やね」と話していました。4月がきたら新しい子が来て、教職員が変わつて、波が寄せて、積み上げた砂の城をさう。また一所懸命積み上げていく。でも4月になったらさざざーです。しかし、全部がマイナスにならない。積み上げてきたことが、「あそこの学校ではあんな実践をしている」と、仲間を応援する灯台のような存在になっていったのではないかと思います。

今、障害児学級に対して新たな顔をもった批判があります。インクルーシブを「通常の学級でみんなと一緒にが大切」と